

大学生の自己愛的脆弱性と友人関係の在り方及び満足感

本田(藤原) 沙貴* ・ 吉 岡 和 子**

要旨

本研究の目的は、まず、自己愛的脆弱性の特徴によって調査対象者が6つのサブタイプに分類されることを確認することである。次に、自己愛的脆弱性サブタイプによって友人関係の在り方にどのような違いがあるのかを検討し、各サブタイプが友人関係にどの程度満足しているのかを明らかにすることである。自己愛的脆弱性の得点によりクラスター分析を行った結果、6つのサブタイプを見出し、想定した2つのうち1つが抽出された。次に、自己愛的脆弱性サブタイプと友人関係の在り方について検討した。友人と自分の役割を対等と考えている一方で、「自分で不安や衝動をコントロールできないので誰かに調整してもらおうとする」特徴を持つサブタイプは、友人の方が自分よりも役割を果たしていると感じており、実際に自分がしていることに自信がないことが推察され、自分が役割を果たせていないと考えていることが示唆された。そのため、友人との関係を深めることに戸惑いを感じている可能性がある。そして、各サブタイプが友人関係にどの程度満足しているのかについては、有意差は見られなかった。友人関係への満足感が60点以上の者が大半であり、思い浮かべた友人は、親密度が高い者であったことが理由の1つであると思われる。

キーワード：自己愛的脆弱性、友人関係、満足感

【問題と目的】

近年の友人関係に関する研究では、希薄で表面的、円滑な対人関係を取る青年の存在が見出されており（上野・上瀬・松井・福永, 1994, 岡田, 1995, 岡田, 2007）、従来の関係性とは異なっていることが指摘されている。例えば、藤井（2001）は「近づきたい・近づきすぎたくない」「離れたい・離れすぎたくない」というヤマアラシ・ジレンマを抱える青年を見出している。また、友人関係において一歩踏み込んだ関係になることを恐がる「ふれあい恐怖」の心性を持つ青年も存在する（岡田, 2002）。しかし、岡田（1993）は青年の友人関係を調査し、全ての青年が現代的な友人関係をとるわけではないことを明らかにしている。また、岡田（1999）や吉岡（2001）は現代的な友人関係を構

築する青年は必ずしもその友人関係に満足しているわけではないことを示唆している。岡田（2007）は、群れ指向群と自己愛的脆弱性との間には正の関連があると述べている。群れ指向群とはお互いを傷つけ合うことを避ける快活的関係であり、病理的自己愛とNPI 短縮版（小塩, 1998）の承認・賞賛への過敏さに関連があることを指摘した。その要因として、自分や相手を傷つけないように警戒することで他者からの肯定的な評価を維持することができるため、自尊感情の低下が抑制されると述べ、過敏型自己愛と類似した特徴をもつことを示唆している。

過敏型自己愛について、上地・宮下（2005）はコフトの理論をもとに自己愛的脆弱性と概念化した。自己愛的脆弱性の中核的指標は「自然な自己顕示ができ

*JCHO九州病院 臨床心理士

**相談室委員：福岡県立大学大学院人間社会学研究科 心理臨床専攻 教授

ないこと、自己顕示に伴う強い恥意識」であり、自己の価値や存在意識と関連した傷つきを処理し、肯定的自己評価や心理的安定を維持する能力が脆弱なことを意味する(上地・宮下, 2005)。誰かに慰めたり褒めたりしてほしいものの、そうした欲求を満たすための行動に恥を感じるのである。また、自己愛的脆弱性の高い者が現実に即して自己を肯定するためには、他者からの無条件の肯定が必要だと言われている(上地・宮下, 2004)が、彼らは常に他者からの肯定を求めるため他者評価に非常に敏感で、他者の何気ない態度を否定的・無関心な態度と認識し傷ついてしまうのではないだろうか。その傷つきを避けるため、また他者からの肯定的な評価を維持する為に希薄で表面的、円滑な友人関係をとっていると言えるだろう。また、先述したように他者からの評価に敏感になるあまり、相手は表面的な関わりを求めているのではないかと考えて、相手の期待に沿うような友人関係をとっている可能性がある。そして、大学生の自己愛的脆弱性の状態について、神谷・岡本(2013)、神谷・岡本・高野(2013)では自己愛的脆弱性尺度(NVS短縮版、上地・宮下, 2009)を用いてクラスタ分析を行い、大学生を自己愛的脆弱性の状態により類型化し、自己愛的脆弱性サブタイプを見出した(神谷・高野, 2013)。NVS短縮版は、「承認称賛への過敏さ」「自己顕示抑制」「潜在的特権意識」「自己緩和不全」の4下位尺度で構成されている。

サブタイプはそれぞれ4下位尺度得点が全て低い【非脆弱群】、自己緩和不全が高い「自己緩和不全群」、自己顕示抑制が高い「自己顕示抑制群」、4下位尺度得点全てが高い【脆弱群】である(表1)。この分類では、自己緩和不全群と自己顕示抑制群において、承認・賞賛過敏性の高さが中程度となっている。自己緩和不全群と自己顕示抑制群には、承認・賞賛過敏性の高い者と低いものが含まれている可能性が伺える。そのため、傷つきを自己処理することができず自己を表現することができるが他者の目に敏感である群(E群)と、傷つきを自己処理できるが他者の目に敏感で自己を表現できない群(F群)の2群を加えた6つのサブタイプが想定される。そこで本研究では、自己愛的脆弱性サブタイプを再検討する(表2)。

以上、述べてきたように、自己愛的脆弱性の傾向を持つ青年は群れる友人関係や退却的な友人関係を取りやすいと考えられるが、そのサブタイプによって友人関係のとりかたが異なっている可能性もあるだろう。現代的な友人関係に満足していない青年がいることから、自己愛的脆弱性のいくつかのタイプは現代的な友人関係を取り、そしてその関係に満足していないタイプがいると言えるのではないだろうか。近年の友人関係研究を見てみると、友人関係は様々な捉え方で検討することができるようだ。吉岡(2001)は友人関係を理想と現実に分け、そのズレと満足感について検討を

表1 神谷・高野(2013)の自己愛的脆弱性サブタイプの特徴

NVS短縮版下位尺度得点				
サブタイプ	自己顕示抑制	自己緩和不全	承認賞賛過敏性	潜在的特権意識
非脆弱群	低い	低い	低い	低い
自己緩和不全群	低い	高い	中程度	中程度
脆弱群	高い	高い	高い	高い
自己顕示抑制群	高い	低い	中程度	中程度

神谷・岡本(2012)、神谷・岡本・高野(2013)の対象者におけるクラスタ分析の結果からの判断

表2 本研究で想定する自己愛的脆弱性サブタイプ

NVS短縮版下位尺度得点				
サブタイプ	自己顕示抑制	自己緩和不全	承認賞賛過敏性	潜在的特権意識
非脆弱群	L	L	L	L
自己緩和不全群	L	H	L	M
脆弱群	H	H	H	H
自己顕示抑制群	H	L	L	M
E群	L	H	H	M
F群	H	L	H	M

H: 高い M: 中程度 L: 低い

行っている。また、友人関係は自分から相手、相手から自分という相互作用をもつものである。美山(2003)は友人関係を自分→相手と相手→自分に分け、青年は、自分が思っているよりも相手は自分と親しいと思っていないと考えることを指摘している。そして、友人関係を心理的な距離で測る際、自分→相手と相手→自分に分け、ズレが生じていることを指摘した。このように、友人関係を検討する上では理想－現実の違いや相互作用のズレを考慮することが必要なのではないだろうか。友人との関係を「理想－現実」、「相手－自分」の相互作用という2つの側面からとらえると(1)友人にしてほしいこと、友人が自分にしてくれること(《友人→自分》の理想と現実)(2)自分が友人にしたいこと、実際に自分がしていること(《自分→友人》理想－現実)(3)友人が自分にしてくれること、自分が友人にしていること(《友人⇄自分》現実の相互作用)(4)友人にしてほしいこと、自分が友人にしたいこと(《友人⇄自分》理想の相互作用)という4つのパターンが考えられる。さらに、岡田(2007)が指摘するように、青年が円滑な友人関係を重視する背景には、「他の人は深い関わりを求めているのではないだろう」という考えがあるように思われる。本当はもっと友達と親密になりたいという気持ちがありながらも、本音を話して否定されたくない、周りから浮くのが怖い、という思いから希薄で表面的、円滑な関係を築いているのではないだろうか。自分は友人と親しくしたいけれど友人は自分と親しくしたいと思っていないだろうと想像して、相手が抱いていると予想される理想的な友人関係に合わせているとも言える。そこで本研究では現代的な友人関係を、自分が理想としているよりも友人が自分に求めている役割は低いだろうと考え踏みとどまっている関係と捉えてみる。つまり、理想が高いが、友人からの期待を低く認識しているため現実はそれに合わせる形で低くなるのではないだろうか。「理想－現実」、「相手－自分」から考えると(5)自分が友人にしたいこと(《自分→友人》理想)、友人が自分に期待していると思うこと(《友人→自分》期待予想)、(6)友人が自分に期待していると思うこと(《友人→自分》期待予想)、実際に自分がしていること(《自分→友人》現実)、というパターンにも注目する必要があると考えられる。以上、友人関係の6つのパターン(表3)を基に、友人関係の在り方を検討する。

先述した通り友人との関係は青年にとって大きな意味がある。青年は友人との関わりの中で多くのものを得ると考えられる。丹野・松井(2006)は「友人関係

表3 友人関係の6つのパターン

	自分→友人	友人→自分
理想と現実	パターン(2)	パターン(1)
現実		パターン(3)
理想		パターン(4)
理想⇄期待予想	パターン(5)	
現実⇄期待予想	パターン(6)	

が個人の広義の内的適応に与える影響や、内的適応に果たしている役割」を友人関係機能と定義している。また、「個人の内的適応を促進しうる友人関係の側面」を友人関係機能成分と定義し「安心・気楽さ」「娯楽性」「関係継続展望」「情緒的結びつき」「相談・自己開示」「支援性」「肯定・受容」「学習・自己向上」「人生の重要な意味」という9つの成分に注目し友人関係機能尺度短縮版を作成している(丹野, 2008)。さらに、下斗米(2000)は個人が友人に対して期待する役割と実際に遂行されている役割について役割行動期待尺度を用いて検討を行っている。役割行動期待尺度は「支援性」「近接性」「自立性」「娯楽性」「類似性」「力動性」という6つの下位尺度で構成されている。本研究では、友人関係の在り方を検討するために、役割に注目し、友人関係機能尺度短縮版と役割行動期待尺度の項目内容を参考に「安心・気楽さ」「支援性」「肯定・受容」「娯楽性」について検討することにした。

本研究の目的は、まず、自己愛的脆弱性の特徴によって調査対象者が6つのサブタイプに分類されることを確認することである。次に、自己愛的脆弱性サブタイプによって友人関係の在り方(6つのパターンでの役割)にどのような違いがあるのかを検討し、さらに、各サブタイプが友人関係にどの程度満足しているのかを明らかにすることである。

【方 法】

1. 調査時期および調査対象者

2017年7月から8月にかけて福岡県内4大学の大学生174名(男性68名、女性106名)を対象に行った。

2. 倫理的配慮

調査は匿名であり回答は統計的に処理されるため、個人を特定したり研究以外の目的で使用したりすることはない、と質問紙に明記し口頭でも説明した。また、回答中に気分が悪くなった場合はその場で回答を中断するように伝えた。

3. 調査内容

1) 自己愛的脆弱性について

NVS短縮版(上地・宮下, 2009)、20項目を用いた。回答を「全くない」「めったにない」「たまにある」「ときどきある」「よくある」の5件法で求めた。「1. 全くない」を1点「2. めったにない」を2点「3. たまにある」を3点「4. ときどきある」を4点「5. よくある」を5点とした。「承認・賞賛への過敏さ」「自己顕示抑制」「潜在的特権意識」「自己緩和不全」の4つの下位尺度ごとに平均値を算出した。

2) 友人関係について

友人関係機能尺度(丹野, 2008)と役割行動期待尺度(下斗米, 2000)から共通している項目を取り出し、因子名は丹野(2008)を用いて、「安心・気楽さ」5項目、「支援性」6項目、「肯定・受容」5項目、「娯楽性」5項目からなる友人関係機能尺度を作成した。21項目について「全くあてはまらない」「あてはまらない」「どちらでもない」「あてはまる」「とてもよくあてはまる」の5件法で回答を求めた。「1. 全くあてはまらない」を1点「2. あてはまらない」を2点「3. どちらでもない」を3点「4. あてはまる」を4点「5. とてもよくあてはまる」を5点とした。

「普段あなたが関わりのある同性の友人Aさんをお願い浮かべて下さい。これから、Aさんとの関係についてお尋ねします。」と教示を行った。①《友人→自分》の現実:Aさんはあなたにとってどのような存在ですか?②《友人→自分》の理想:Aさんにどんな存在でいてほしいと思いますか?③《自分→友人》の現実:Aさんに対して、あなたは実際にどのように接していますか?④《自分→友人》の理想:Aさんに対してあなたはどうかありたいと思っていますか?⑤《友人→自分》の期待:Aさんはあなたに対してどのように接してもらいたいと思っていますか?の5パターンについて回答を求めた。表3に示した友人関係の6つのパターンについて、パターン(1)は②-①、パターン(2)は④-③、パターン(3)は①-③、パターン(4)は②-④、パターン(5)は④-⑤、パターン(6)は⑤-③のように差の得点を求めた。差の得点が0に近いほど、自分の思うように友人関係を築けているということになる。

3) 友人関係の満足感について

0点が最も満足していない、100点が最も満足していることを表す図1を作成し、「Aさんとの今の関係にどのくらい満足していますか?」という質問に対して、

図の目盛に○印をつけるよう教示した。



図1 友人関係の満足感

2)、3)及び《友人→自分》の理想と現実の質問の順番を入れ替えた4種類の調査用紙を作成し、各大学の講義時間中に質問紙を配布し、その場で回答を求め回収した。

【結 果】

回答に不備のなかった173名(男性67名、女性106名)を分析対象とした。平均年齢は男性20.12歳(SD=1.24)、女性20.19歳(SD=1.06)であった。

1. 友人関係機能尺度

《友人→自分》の現実の得点を用いてCronbachの α 係数の算出を行い、内的整合性の検討を行った。その結果「安心・気楽さ」5項目では $\alpha=.927$ 「支援性」6項目では $\alpha=.908$ 「肯定・受容」5項目では $\alpha=.869$ 「娯楽性」5項目では $\alpha=.898$ となり4つの尺度が十分な内的整合性をもつことが確認された。尺度ごとに平均値を算出し、以下の分析を行った。

2. 自己愛的脆弱性サブタイプ

NVS短縮版尺度(2009)の4下位尺度を用いたクラスター分析(Ward法)を行い、6つのクラスターを得た(表4、図2)。第1クラスターは4下位尺度全ての得点が低いことから【非脆弱群】とした。第2クラスターは、「自己顕示抑制」と「自己緩和不全」の得点が高いことから「抑制・不全群」とした。第3クラスターは「承認・賞賛過敏性」の得点が高いことから【過敏群】とした。第4クラスターは「自己顕示抑制」「承認・賞賛過敏性」の得点が高いことから「抑制・過敏群」とした。第5クラスターは4下位尺度全ての得点が高いことから【脆弱群】とした。第6クラスターは4下位尺度全ての得点が特に低く、【非脆弱群】であるとも考えられるが、デンドログラムから違う群と判断し「全低群」とした。【非脆弱群】は48名、【抑制・不全群】は41名、【過敏群】は29名、【抑制・過敏群】は24名、【脆弱群】は26名、【全低群】は5名であった。

表4 自己愛的脆弱性サブタイプのNVS短縮版尺度得点平均値

NVS短縮版 サブタイプ	自己顕示抑制	自己緩和不全	潜在的特権意識	承認・賞賛過敏性
A：非脆弱群（48名） （男25名・女23名）	2.43（0.50）	2.67（0.54）	2.06（0.43）	2.42（0.67）
B：抑制・不全群（41名） （男20名・女21名）	3.48（0.63）	4.17（0.69）	2.60（0.79）	2.65（0.68）
C：過敏群（29名） （男4名・女25名）	2.98（0.39）	3.17（0.60）	2.28（0.50）	3.40（0.51）
D：抑制・過敏群（24名） （男7名・女17名）	3.89（0.42）	3.38（0.56）	3.38（0.49）	3.97（0.40）
E：脆弱群（26名） （男6名・女20名）	4.22（0.44）	4.61（0.31）	3.52（0.55）	3.92（0.57）
F：全低群（5名） （男5名・女0名）	1.36（0.36）	1.20（0.14）	1.28（0.23）	1.44（0.41）
F値	70.73*** E=D>B>C>A	72.24*** E>B>D=C>A	36.42*** E=D>B=C>A	48.40*** D=E>C>B=A

不等号は多重比較結果を示す。数値は平均値（SD）を示す ***p<.001

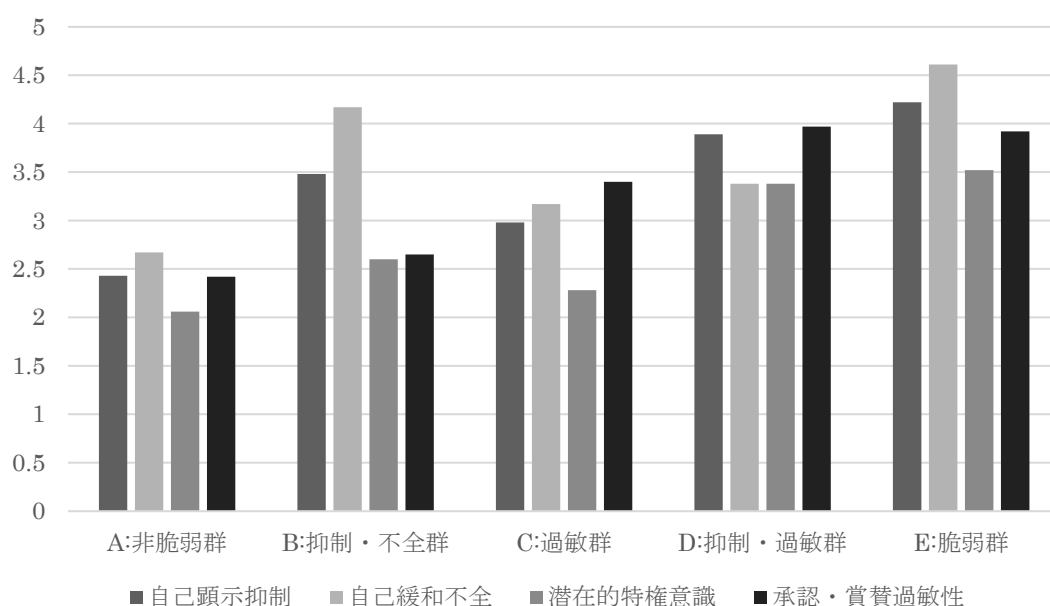


図2 自己愛的脆弱性タイプのNVS短縮版尺度得点平均値

3. 自己愛的脆弱性サブタイプと友人関係

自己愛的脆弱性サブタイプについて6つの群を抽出したが、【全低群】は5名しか該当しなかったため、分析からは除外した。

友人関係機能の「安心・気楽さ」「支援性」「肯定・受容」「娯楽性」について、友人関係の6つのパターンの得点を従属変数、自己愛的脆弱性サブタイプ5つを

独立変数として1要因分散分析を行った。

1) 《友人→自分》の理想と現実

《友人→自分》の理想から《友人→自分》現実の得点を引いたものを従属変数とした。「安心・気楽さ」「支援性」「肯定・受容」「娯楽性」について、有意な主効果はみられなかった（順に $F(4, 163) = 1.15$, n.s., $f =$

0.17 効果量小; $F(4, 163) = 0.28$, n.s., $f = 0.08$;
 $F(4, 163) = 0.95$, n.s., $f = 0.15$ 効果量小; $F(4, 163)$
 $= 0.05$, n.s., $f = 0.03$ (効果量ほとんどなし)。

2) 《自分→友人》の理想と現実

《自分→友人》の理想から《自分→友人》現実の得点を引いたものを従属変数とした。

「安心・気楽さ」「支援性」「肯定・受容」について、有意な主効果がみられた(順に $F(4, 163) = 2.71$, $p < .05$, $f = 0.26$ 効果量中; $F(4, 163) = 3.74$, $p < .01$, $f = 0.30$ 効果量中; $F(4, 163) = 2.74$, $p < .05$, $f = 0.26$ 効果量

中)。「娛樂性」について、有意傾向で主効果がみられた($F(4, 163) = 2.40$, $p < .10$, $f = 0.24$ 効果量小)。

多重比較(HSD)の結果、「安心・気楽さ」については、【抑制・過敏群】が【脆弱群】より差の得点が有意に小さく0に近い数値であった($d = 0.77$ 効果量中)。

「支援性」については、【抑制・過敏群】が【抑制・不全群】より差の得点が有意に小さく0に近い数値であった($d = 0.70$ 効果量中)。「肯定・受容」については、【脆弱群】が【非脆弱群】より($d = 0.62$ 効果量中)、【脆弱群】が【抑制・過敏群】より($d = 0.74$ 効果量中)差の得点が有意に小さく近い数値であった。結果

表5-1 自己愛的脆弱性サブタイプと友人関係：《自分→友人》の理想と現実（安心・気楽さ）

サブタイプ	Mean	SD	F値 (効果量f)	多重比較：HSD (効果量d)
非脆弱群	0.19	0.55		
抑制・不全群	0.31	0.59		
過敏群	0.14	0.45	2.71*	抑制・過敏群<脆弱群*
抑制・過敏群	0.08	0.50	(0.26)	(0.77)
脆弱群	0.53	0.65		

* $p < .05$

効果量f：大 (Large) = 0.40, 中 (Medium) = 0.25, 小 (Small) = 0.10

効果量d：大 (Large) = 0.80, 中 (Medium) = 0.50, 小 (Small) = 0.20

表5-2 自己愛的脆弱性サブタイプと友人関係：《自分→友人》の理想と現実（支援性）

サブタイプ	Mean	SD	F値 (効果量f)	多重比較：HSD (効果量d)
非脆弱群	0.13	0.43		
抑制・不全群	0.42	0.58		
過敏群	0.09	0.52	3.74**	抑制・不全群>
抑制・過敏群	0.04	0.48	(0.30)	抑制・過敏群*
脆弱群	0.39	0.57		(0.70)

** $p < .01$ * $p < .05$

効果量f：大 (Large) = 0.40, 中 (Medium) = 0.25, 小 (Small) = 0.10

効果量d：大 (Large) = 0.80, 中 (Medium) = 0.50, 小 (Small) = 0.20

表5-3 自己愛的脆弱性サブタイプと友人関係：《自分→友人》の理想と現実（肯定・受容）

サブタイプ	Mean	SD	F値 (効果量f)	多重比較：HSD (効果量d)
非脆弱群	0.04	0.32		
抑制・不全群	0.11	0.44		
過敏群	0.17	0.35	2.74*	非脆弱群<脆弱群*
抑制・過敏群	-0.02	0.32	(0.26)	(0.62)
脆弱群	0.32	0.56		抑制・過敏群<脆弱群*

* $p < .05$

効果量f：大 (Large) = 0.40, 中 (Medium) = 0.25, 小 (Small) = 0.10

効果量d：大 (Large) = 0.80, 中 (Medium) = 0.50, 小 (Small) = 0.20

を表5-1～5-3に示す。

3) 現実の相互作用

《自分→友人》の現実から《友人→自分》の現実の得点を引いたものを従属変数とした。

「支援性」と「娛樂性」については、有意傾向で主効果がみられた（順に $F(4, 163)=2.11$, $p<.10$, $f=0.23$ 効果量小; $F(4, 163)=2.00$, $p<.10$ $f=0.22$ 効果量小)。多重比較（HSD）の結果、「娛樂性」について（表6）、【非脆弱群】が【抑制・不全群】より差の得点が有意に大きく0に近い数値であった（ $d=0.61$ 効果量中）。「支援性」については、各群の差がみられなかった。

「安心・気楽さ」「肯定・受容」については、有意な主効果はみられなかった（順に $F(4, 163)=1.09$, $n.s.$, $f=0.16$ 効果量小; $F(4, 163)=0.67$, $n.s.$, $f=0.13$ 効果量小）。

4) 理想の相互作用

《自分→友人》の理想から《友人→自分》の理想の得点を引いたものを従属変数とした。

「安心・気楽さ」「支援性」「肯定・受容」「娛樂性」

について、有意な主効果はみられなかった（順に $F(4, 163)=0.67$, $n.s.$ $f=0.13$ 効果量小; $F(4, 163)=0.16$, $n.s.$ $f=0.06$ （効果量ほとんどなし）; $F(4, 163)=0.51$, $n.s.$ $f=0.11$ 効果量小; $F(4, 163)=0.81$, $n.s.$ $f=0.14$ 効果量小）。

5) 《自分→友人》の理想と期待予想

《自分→友人》の理想から《自分→友人》の期待予想の得点を引いたものを従属変数とした。

「安心・気楽さ」「支援性」「肯定・受容」「娛樂性」について、有意な主効果はみられなかった（順に $F(4, 163)=0.44$, $n.s.$ $f=0.10$ 効果量小; $F(4, 163)=1.55$, $n.s.$ $f=0.20$ 効果量小; $F(4, 163)=0.22$, $n.s.$ $f=0.07$ （効果量ほとんどなし）; $F(4, 163)=1.17$, $n.s.$ $f=0.17$ 効果量小）。

6) 《自分→友人》と期待予想と現実

《自分→友人》の期待予想から《自分→友人》の現実の得点を引いたものを従属変数とした。

「安心・気楽さ」「娛樂性」について、有意な主効果がみられた（順に $F(4, 163)=2.67$, $p<.05$ $f=0.26$ 効果量中; $F(4, 163)=3.47$, $p<.05$ $f=0.29$ 効果量中）。

表6 自己愛的脆弱性サブタイプと友人関係：現実の相互作用（娛樂性）

サブタイプ	Mean	SD	F値 (効果量f)	多重比較：HSD (効果量d)
非脆弱群	-0.14	0.48	2.00 ⁺ (0.22)	非脆弱群> 抑制・不全群* (0.61)
抑制・不全群	-0.50	0.70		
過敏群	-0.32	0.73		
抑制・過敏群	-0.26	0.43		
脆弱群	-0.35	0.64		

* $p<.05$ ⁺ $p<.10$

効果量f：大（Large）=0.40, 中（Medium）=0.25, 小（Small）=0.10

効果量d：大（Large）=0.80, 中（Medium）=0.50, 小（Small）=0.20

表7 自己愛的脆弱性サブタイプと友人関係：《自分→友人》と期待予想と現実（娛樂性）

サブタイプ	Mean	SD	F値 (効果量f)	多重比較：HSD (効果量d)
非脆弱群	0.06	0.79	3.47* (0.29)	非脆弱群< 抑制・不全群* (0.68)
抑制・不全群	0.58	0.74		
過敏群	0.47	0.73		
抑制・過敏群	0.12	0.72		
脆弱群	0.35	0.61		

* $p<.05$

効果量f：大（Large）=0.40, 中（Medium）=0.25, 小（Small）=0.10

効果量d：大（Large）=0.80, 中（Medium）=0.50, 小（Small）=0.20

多重比較(HSD)の結果、「娯楽性」において(表7)、【非脆弱群】が【抑制・不全群】より差の得点が有意に小さく0に近い数値であった($d=0.68$ 効果量中)。「安心・気楽さ」については、各群の差がみられなかった。

「支援性」「肯定・受容」については、有意な主効果はみられなかった(順に $F(4, 163)=1.00$, n.s. $f=0.16$ 効果量小; $F(4, 163)=0.43$, n.s. $f=0.10$ 効果量小)

4. 自己愛的脆弱性サブタイプと友人関係への満足感

友人関係への満足感について非脆弱群の2名が無回答であったため、その2名を除いた166名を分析対象とした。友人関係への満足感の点数が60点以下のグループ、70点台のグループ、80点台のグループ、90点台のグループ、100点のグループという5つのグループに分けた(表8)。Fisherの直接確率法の結果、有意な人数の差はみられなかった($\chi^2(16)=14.93$, n.s.)。

【考 察】

1. 自己愛的脆弱性サブタイプ

クラスター分析の結果、サブタイプを6群を抽出した。想定したF群は【抑制・過敏群】に当てはまると考えられる。また、新たに【抑制・不全群】という群も見出された。しかし、想定したE群に当たる群は見いだされなかった。E群は友人に頼りがちであるが友人からの評価に過敏なため、自分の感情を調整する為に友人に頼った後で後悔をすることが多いと考えられ、精神的な健康を維持することの難しさが推測される。本研究では健常圏の青年を対象としたため現れにくかったのではないだろうか。今回得られた自己愛的脆弱性サブタイプの各群は、以下のような特徴をもつと考えられる。【非脆弱群】は注目されたり自己表現したりすることに抵抗が無く、自分で不安や衝動のコントロールができる群である。他者からの評価にとらわれることは少ないだろう。【抑制・不全群】は注目されること

が苦手で自己表現を抑えがちな群である。一方、自分で不安や衝動をコントロールできないので誰かに調整してもらおうとするだろう。【過敏群】は他者からどう思われているかに敏感な群である。【抑制・過敏群】は注目されることが苦手で自己表現を抑えがちな群である。無意識下の過度に肯定的な自己評価が強く、他者からどう思われているのかを気にするだろう。【脆弱群】は注目されることが苦手で自己表現を抑えがちな群である。一方、自分で不安や衝動をコントロールできないので誰かに調整してもらおうとするだろう。また、無意識下の過度に肯定的な自己評価が強く、他者からどう思われているのかを気にするだろう。

2. 自己愛的脆弱性サブタイプと友人関係の関連

1)《友人→自分》の理想「Aさんにどんな存在でいてほしいと思いますか？」と2)《友人→自分》現実「Aさんはあなたにとってどのような存在ですか？」の得点差については、自己愛的脆弱性のタイプによる違いはみられなかった。自己愛的脆弱性の程度にかかわらず、友人にしてほしいことと、友人が自分にしてくれることの差は少なく、受動的な友人関係においては、理想通りに得られていると感じていることが推察された。

3)《自分→友人》の理想「Aさんに対してあなたはどうかありたいと思っていますか？」と《自分→友人》現実「Aさんに対して、あなたは実際にどのように接していますか？」の得点差については、「安心・気楽さ」「支援性」「肯定・受容」について、有意な主効果がみられ、「娯楽性」について、有意傾向で主効果がみられた。自分が友人にしたいことと、実際に自分がしていることには、ズレがあり、葛藤があることが推察される。詳細をみると、「安心・気楽さ」については、【抑制・過敏群】より【脆弱群】の方が差の得点が大きかった。【脆弱群】は、自分が友人にしたいことが、実際にはできていないと感じており、【抑制・過敏群】

表8 自己愛的脆弱性サブタイプごとの友人関係への満足感

サブタイプ	≤60点	70点台	80点台	90点台	100点台	合計人数
非脆弱群	3	6	16	13	8	48
抑制・不全群	9	7	10	10	5	41
過敏群	3	7	6	11	2	29
抑制・過敏群	3	2	8	5	6	24
脆弱群	6	4	7	6	3	26
合計人数	24	26	47	45	24	166

数値は人数を示す

は、自分が友人にしたいことが、実際にできていると感じているようである。「支援性」については、【抑制・不全群】が【抑制・過敏群】より差の得点が有意に大きかった。【抑制・不全群】は、自分が友人にしたいことが、実際にはできていないと感じており、【抑制・過敏群】は、自分が友人にしたいことが、実際にできていると感じているようである。「肯定・受容」については、【非脆弱群】と【抑制・過敏群】より【脆弱群】の方が差の得点が有意に大きかった。【脆弱群】は、自分が友人にしたいことが、実際にはできていないと感じており、【非脆弱群】と【抑制・過敏群】は、自分が友人にしたいことが、実際にできていると感じているようである。

《自分→友人》の理想「Aさんに対してあなたはどうかありたいと思っていますか？」と《自分→友人》現実「Aさんに対して、あなたは実際にどのように接していますか？」の在り方についてまとめると、(1)【脆弱群】や【抑制・不全群】は、自分が友人にしたいことが、実際にはできていないと感じており、(2)【抑制・過敏群】は、自分が友人にしたいことが、実際にできていると感じているようである。いずれの群も自己顕示抑制の得点が高く「注目されることが苦手で自己表現を抑えがちな」特徴を持つが、【脆弱群】と【抑制・不全群】は、共に【抑制・過敏群】よりも自己緩和不全の得点が高く「自分で不安や衝動をコントロールできないので誰かに調整してもらおうとする」特徴を持つ群であるため、主体的に友人関係をとることがむずかしいことから、理想と現実には差が生じている可能性が推察される。

4) 《自分→友人》の現実「Aさんに対して、あなたは実際にどのように接していますか？」と《友人→自分》の現実「Aさんはあなたにとってどのような存在ですか？」の得点差については、「娯楽性」においてのみ、【非脆弱群】が【抑制・不全群】より差の得点が有意に小さかった。この得点の意味は、友人の方が自分よりも役割を果たしていると感じている程度が、【抑制・不全群】が大きいことを示している。「娯楽性」の項目は一緒にいるときに、相手が退屈しない、楽しい、愉快的気分になるという内容を含んでいる。【抑制・不全群】の「注目されることが苦手で自己表現を抑えがちな」特徴が表れた結果であると考えられる。

5) 《自分→友人》の理想「Aさんに対してあなたはどうかありたいと思っていますか？」と《友人→自分》の理想「Aさんにどんな存在でいてほしいと思いますか？」及び《自分→友人》の理想と《自分→友人》の

期待予想「Aさんはあなたに対してどのように接してもらいたいと思っていますか？」の得点差については、自己愛的脆弱性のタイプによる違いはみられなかった。自己愛的脆弱性の程度にかかわらず、友人にしてほしいこと、自分が友人にしたいこと及び友人が自分に期待していると思うことの差は少なく、対等な関係を築きたいと考えているようである。

最後に、6) 《自分→友人》の期待予想「Aさんはあなたに対してどのように接してもらいたいと思っていますか？」と《自分→友人》の現実「Aさんに対して、あなたは実際にどのように接していますか？」の得点の差については、「娯楽性」において【抑制・不全群】の方が【非脆弱群】より得点が大きかった(0.58と0.06)。【抑制・不全群】は、友人が自分に期待していると思うことと、実際に自分がしていることに差があると感じていることが窺われる。

以上、友人関係の6つのパターン別の分析から得られた結果をまとめると、【抑制・不全群】は、実際に自分がしていることに自信がないことが推察される。一方、【抑制・不全群】と同じように「自分で不安や衝動をコントロールできないので誰かに調整してもらおうとする」特徴を持つ【脆弱群】は、それに加えて「無意識下の過度に肯定的な自己評価が強く、他者からどう思われているのかを気にする」という特徴を持つ。そのため、実際の自分の行動についての見積もりが高くなっている可能性が考えられる。

本研究では、現代的な友人関係を、自分が理想としているよりも友人が自分に求めている役割は低いだろうと考え踏みとどまっている関係と捉え、友人からの期待を低く認識しているため現実はそのに合わせる形で低くなると想定した。しかしながら、本研究の結果5)と6)からは、友人と自分の役割を対等と考えている一方で、「自分で不安や衝動をコントロールできないので誰かに調整してもらおうとする」特徴を持つタイプは、友人の方が自分よりも役割を果たしていると感じており、実際に自分がしていることに自信がないことが推察され、自分が役割を果たせていないと考えていることが示唆された。そのため、友人からの期待に応えられない、近づきすぎるとガッカリされるのではないかと思うことで友人との関係を深めることに戸惑いを感じている可能性があるのではないだろうか。

3. 自己愛的脆弱性サブタイプと友人関係への満足感

自己愛的脆弱性サブタイプの5群において友人関係への満足感に統計的に有意な差はみられなかった。本

研究では健常圏の青年の友人関係を調査していること、一般的な友人として「普段関わりのある同性の友人」という教示を行ったことから、友人関係への満足感が60点以上の者が大半であり、思い浮かべた友人は、親密度が高い者であったことが理由の1つであると思われる。

4. 今後の展望

まず本研究では、自己愛的脆弱性の特徴により青年を6つのサブタイプに分類した。6つのサブタイプのうち2つは神谷・高野(2013)と同様の群であり、さらに想定した2群のうち1つが抽出された。しかし、想定されたサブタイプのうち、得られた群と得られない群があることから、5群あるいは6群が自己愛的脆弱性の特徴による分類で安定して得られる群なのかについては、本研究だけでは結論づけることはできない。今後、再現性があるかどうかを確認していく必要があるだろう。

次に本研究では一般的な友人として「普段関わりのある同性の友人」という教示を行った。しかし、思い浮かべた友人について親密度が高い者と低い者が混ざっていた可能性がある。また、本研究では、友人関係の得点が全体的に高かったことから、ある程度満足している友人との関係を想像した青年が多かったと考えられる。思い浮かべてもらう友人についての教示法の改善が必要だろう。

最後に、友人の方が自分よりも役割を果たしていると感じる、実際に自分がしていることに自信がない、自分が役割を果たせていないという不安を抱えているタイプへの支援方法である。彼らは、自分が友人のために何かをしていると感じにくいようである。質問紙調査のみでは、実際にあまりしていないのか、本人がそう思っているだけなのかは明らかにできない。実際に彼らはどのように友人と接しているのかを確認するために面接調査も行う必要があると考えられる。

【文 献】

- 榎本博明(1997). 自己開示の心理学的研究. 北大路書房.
- Erik H. Erikson 1890 Identity and the Life Cycle (エリック・H・エリクソン, 西平直・中島由恵(訳)(2011). アイデンティティとライフサイクル. 誠信書房, 128-134, 142-145).
- 藤井恭子(2001). 青年期の友人関係における山アラシ・ジレンマの分析. 教育心理学研究, 49(2), 146-155.

- 上地雄一郎・宮下一博(2004). 自己愛的脆弱性尺度の妥当性の検討—友人関係への影響の検討を通して—. 岡山大学大学院教育学研究科研究集録, 140, 1-6.
- 上地雄一郎・宮下一博(2005). コフォートの自己愛心理学に基づく自己愛的脆弱性尺度の作成. 日本パーソナリティ研究, 14(1), 80-91.
- 上地雄一郎・宮下一博(2009). 自己愛的脆弱性尺度の妥当性の検討—友人関係への検討を通して—. 岡山大学大学院教育学研究科研究集録, 140, 1-6.
- 神谷真由美・高野恵代(2013). 大学生の心理的な支えと自己愛的脆弱性との関連—自己対象体験による検討—. 教職研究, 6, 11-19.
- 松井豊(1990). 友人関係の機能. 斉藤耕二・菊池章夫(編著) 社会化の心理学ハンドブック人間形成と社会と文化. 川島書店, 282-296.
- 美山理香(2003). 大学生の友人との心理的距離に関する基礎的研究. 九州大学心理学研究, 4, 27-35.
- 岡田努(1999). 現代青年に特有な友人関係の取り方と自己愛傾向の関連について. 立教大学教職研究, 9, 21-31.
- 岡田努(2002). 現代大学生の「ふれあい恐怖的心性」と友人関係の関連についての考察. 性格心理学研究, 10(2), 69-84.
- 岡田努(2007). 現代青年の心理学—若者の心の虚像と実像—. 世界思想社.
- 岡田努(2007). 大学生における友人関係の類型と、適応及び自己の諸側面の発達課題について. パーソナリティ研究, 15(2), 135-148.
- 小塩真司(1998). 青年の自己愛傾向と自尊感情、友人関係の在り方との関連. 日本教育心理学研究, 46(3), 280-290.
- 小塩真司・川崎直樹(2011). 自己愛の心理学—概念・測定・パーソナリティ・対人関係—. 金子書房, pp.2-65, pp.135-146, pp.184-196.
- 下斗米淳(2000). 友人関係の親密化過程における満足・不満足感及び葛藤の顕在化に関する研究—役割期待と遂行のズレからの検討—. 実験社会心理学研究, 40(1), 1-15.
- 丹野宏昭・松井豊(2006). 大学生における友人関係機能の探索的検討. 筑波大学心理学研究, 32, 21-30.
- 丹野宏昭(2008). 大学生の内的適応に果たす友人関係機能. 青年心理学研究, 20, 55-69.
- 上野行良・上瀬由美子・松井豊・福富護(1994). 青年の交友関係における同調と心理的距離. 教育心理学研究, 42(1), 21-28.

吉岡和子 (2001). 友人関係の理想と現実のズレ及び自己受容から捉えた友人関係の満足感. 青年心理学研究, 13, 13-30.

【付 記】

本論文は、第一著者が2017年度に提出した修士論文を、第二著者が統計分析を含めて加筆修正したものである。質問紙を配布するにあたりご協力を頂いた福田恭介先生、北九州市立大学 田中信利先生、西日本工業大学 米光真由美先生、大学院生の續木奈美さん、中山航さん、結田希望さん、分析にあたりご助言を頂いた久留米大学 原口雅浩先生、和光大学 高坂康雅先生に深く感謝いたします。

最後に、質問紙にご回答いただいた方々を含め、本論文を作成するにあたりご協力をいただきました全ての方々に厚くお礼申し上げます。ありがとうございます。

(2020. 11. 30原稿受付 2021. 1. 14掲載決定)